

# OS SCREEN

## 1953年

### オーエスの歴史がはじまった

オーエスのルーツは1953年までさかのぼります。  
大阪府堺市に創立し、映画館のスクリーン製造、販売、  
施工からはじまりました。

## 2000年

### ホームシアターの夜明け

OS SCREENの第一歩はここから始まります。  
第一号モデルはそれまでの塩ビを使ったスクリーンからの  
脱却を図るファブリックスクリーン「ピュアマット」です。

## OS SCREENの登場が、 ホームシアターの夜明けを告げた。

ピュアマットは裏・表の織り方の異なる2層を同時に織り上げるオーエス独自の織物です。経・緯の糸をランダムに織り上げた不規則な折り目は、プロジェクターの大敵である「モアレ」を防ぐ、強力な武器となりました。ピュアマットはプロジェクターのデジタル化の波にマッチして非常に高い評価を得ることとなりました。

ファブリックのもたらす効果として、ナチュラルで落ち着いた映像の再現を可能にしたのです。それまでのスクリーンは、プロジェクターの明るさを補う、高ゲインを求められるものでした。ピュアマットはそこにピュアな映像を楽しむ文化を提案したのです。

以来、ピュアマットのコンセプトは**何も足さない、何も引かない**。プロジェクターの特徴をそのまま素直に紡ぎだすスクリーンであること、これが他の追随を許さないOS SCREENなのです。

ピュアマットの登場は、同時に日本のホームシアターの夜明けでもあります。



2005年雑誌広告 ピュアマットの第一号広告

↑買替用のスクリーン天吊り可能なエクステンションポール（¥11,500/1本）。サイズの特別注文も可能

↑「スーパー-HiViCAST」の「70.Various Color Material II」より、カラー（色の濃さ）はシネマモードの初期値では「10」だったが、そのままでほとんど「霞い」印象もあった

↑「スーパー-HiViCAST」の「70.Various Color Material II」より、カラー（色の濃さ）はシネマモードの初期値では「10」まで上げてみた。本機のカラー調整は色の透明感を保ったまま濃くなる傾向だったので、これでも絵がもっとりなることはない

厳重な検品項目が裏付けられる  
オーエス

「シフト対策としてテンション調整機能を探求」

プロジェクターの普及を促すべく、安く止めるべく、広い性能を確保したピュアマットシリーズ。スクリーン最高の状態で、ユーザーに寄り添った製品に育てる。厳重な検品体制を築いていく。これも人の「秘密」が、両面を製造し、

しかし、国内市場をターゲットにしては、海外への輸出も必要です。決して「国内産」が有利なわけではないですが、基本的な材料や工程が同じでも、寸違ひのものを再現するのは、極めて困難なことです。スクリーンというものは、ミリ単位の精度が必要とされる製品であり、本品に「ケイトンさん」（佐藤さん）

そのアテ、ケイトンさん、備わった。ひたすら、その品質を追求し、

に繋がっている。

映写機を買い替える機会があるときに、ホームシアターにおけるスクリーンの重要性を啓蒙してきました。そのため現在OS SCREENはリファレンススクリーンとして、様々な試写室で映像評価に活躍しています。

2006年8月号 HiVi 誌（ステレオサウンド）

オーエスプラス e は機会があるごとに、ホームシアターにおけるスクリーンの重要性を啓蒙してきました。そのため現在OS SCREENはリファレンススクリーンとして、様々な試写室で映像評価に活躍しています。

↑「スーパー-HiViCAST」の「70.Various Color Material II」より、カラー（色の濃さ）はシネマモードの初期値では「10」だったが、そのままでほとんど「霞い」印象もあった

↑「スーパー-HiViCAST」の「70.Various Color Material II」より、カラー（色の濃さ）はシネマモードの初期値では「10」まで上げてみた。本機のカラー調整は色の透明感を保ったまま濃くなる傾向だったので、これでも絵がもっとりなることはない

DLPの光のパワーとピュアマットII EXで  
コントラスト感豊かな絵を引きだそう

↑「スーパー-HiViCAST」の「70.Various Color Material II」より、カラー（色の濃さ）はシネマモードの初期値では「10」だったが、そのままでほとんど「霞い」印象もあった

↑「スーパー-HiViCAST」の「70.Various Color Material II」より、カラー（色の濃さ）はシネマモードの初期値では「10」まで上げてみた。本機のカラー調整は色の透明感を保ったまま濃くなる傾向だったので、これでも絵がもっとりなることはない

2012年6月号 HiVi 誌（ステレオサウンド）

ピュアマットII EXは、FHD対応のピュアマットの最高峰です。その技術は現在のピュアマット204に引き継がれています。

## プロジェクターの高輝度化 ピュアマット II・II plus (WF201、202)

ピュアマットの登場は、完全拡散型のスクリーンの価値を高めました。またさらなる研究開発により、光の透過損失がなく、安定したゲインを確保するバックコーティング技術を開発し、FHD (1080p) の解像度にも対応するスクリーンとしてピュアマット II・II plus が誕生しました。(2002年2月)

プロジェクターの光源も明るさを増し、ビーズやパールなどでプロジェクターの光量をカバーするという使われ方もほとんどなくなり、リファレンススクリーンとしての評価を高めました。2010年に誕生したピュアマット II EX (WF203) は、フルHD (1080p) プロジェクターの登場に合わせ、最もふさわしいスクリーンとして愛好者が増えました。

## 4Kの登場 ピュアマット III・III Cinema (WF301、302)

2011年世界初のホームシアター向け4Kプロジェクターの登場は、スクリーンのモアレの問題以外に、画素が見えないのにスクリーン表面の凹凸(エンボス)が見えるという新たな課題を生み出しました。プロジェクターの画像処理技術が進み「何も足さない、何も引かない」という「ピュアマット」のコンセプトは、4Kの高画素になってさらに重要になりました。ピュアマットの特徴を維持したまま糸の太さを変え、織り目を小さくするという新たな技術で、滑らかな幕面が特長のピュアマット III (WF301) を2013年に生み出しました。4Kとの相性が非常に良く、更なる開発による新たなコーティング技術は、2014年ピュアマット III Cinema (WF302) として電動巻取り型スクリーンへの搭載として結実しました。

WF302は、ゲイン1.0の完全拡散型の最高級スクリーンとしてお勧めしています。

## HDR技術の登場 レイロドール (HF102)

人間の目に見える感覚に映像処理技術も近づけようというHDR(ハイ・ダイナミック・レンジ)は、技術紹介されるや否やあつという間にフラットディスプレイに搭載され、プロジェクターにも次々に新技術が導入されるようになりました。するとゲイン1.0のWF302では階調域が物足りず、プロジェクターの明るさを補填したい、と開発されたのがレイロドール(HF102)です。(詳細はP.7をご覧ください)

ピュアマットに代表される OS SCREEN は、プロジェクターの歴史とともに歩み、スクリーンシアターをお楽しみいただいている全ての方のために開発を続けています。



2012年



2013年



2016年



**HiVi**  
2017  
Grand Prix

**その進化とともに毎年各種の AV アワードを受賞しています。**

2002年ピュアマット II、2003年ピュアマット II Plus、2013年ピュアマット III Cinema、2017年レイロドールが HiVi グランプリなど様々なアワードを受賞しています。特にレイロドールは他に類を見ない第4の生地特性であり、HDR プロジェクター用のスクリーンとして多くの評論家諸氏のご賛同をいただきました。

代表的なアワード



HiVi  
BESTBUY  
2016  
SUMMER



HiVi  
グランプリ  
2014



HiVi  
冬のベストバイ  
2006



VGp  
2011  
金賞



VGp  
2018  
技術大賞



HTGp  
2020  
GOLD AWARD WINNER





**レイロドール**  
REIRODORU(レイロドール・生地型 HF102) は、近日発売予定です。

**HDR 適合スクリーン「レイロドール」誕生**

人間の瞳の持つ「電算を識別する能力」にできるだけ近づける、それが HDR (ハイ・ダイナミック・レンジ) 技術です。「レイロドール」は、従来の拡散型ピュアマット III Cinema の 10 倍のコントラスト比を実現、しかもホットスポットを抑制、反射型と拡散型の特質も兼ねた、HDR 対応プロジェクターに適合する第 4 の画質「広階調型」HDR スクリーンです。

2017年